

1 ハーディクヌート

I.

城壁の東へ西へ

男は威風堂々と^の申し歩いた

丸々七十年を生きてきたが

戦^{いくさ}のなかつた年月はわずか七年

その時代 ブリトン人は信頼を裏切り

5

スコットランドにひどい災いをもたらした

男の剣は 敵にはかねて大きな脅威

恐るべき武者だった

II.

丘の上高く 男の城は建っていた

大きな広間と高い塔

10

見るも豪華な数々の部屋に

大勢の騎士を住ませた

奥方は比類なく^{うるは}麗しく

貞節と美を兼ね備え

女王エレノア様を除いては

15

国中に優る^{ひと}女もない

III.

二人には十三人の息子が生まれ

いずれ劣らぬ^{つわもの}強者揃い

剣を手に 流血おびただしい闘いで

九人までもが死んでいった

20

生きのびた四人よ 末長く生きながらえて

父親とその国に仕えんことを

息子たちの誉れは高く 力は強く

堂々たる大将の^{うつわ}器

IV.

息子たちが大きな愛情を注いだのは美しいフェアリー

25

優しく愛^{いと}しい彼らの妹
帯を巻いた腰は細く
髪は輝く金色
その美しさが どんな悲しみ
老^{ろうにやく}若皆に 30
親類縁者皆に生んだのか
後の世に語り伝えられている

V.

ある夏のこと ノルウェー王は
権力も武力も欲しいまま
美しいスコットランドに 35
大勢の屈強の兵を連れて上陸した
その報^{しら}せがスコットランド王に届いた時
王は晩餐^{さなか}の最中
戦^{いくさ}装束に身を固めた高貴なクランの長^{おき}たちと
血のように赤いワインを飲んでいた 40

VI.

「馬を 馬を 王様
敵が浜辺に押し寄せています
ざらざら光る槍^{たづさ}を携えた二万人もの兵士たちを
ノルウェー王が率^{ひき}いています」
「わしの馬 葦毛のメイジをここへ」 45
立ち上がって王は言った
歴代のスコットランド王の中で
これほどの名馬を持った王はいなかった

VII.

「小姓よ 行って
高い丘に住むハーディクヌートに告げよ 50
敵も恐れる剣を抜いて
急ぎわたしに従うように」
王の命令一下
小姓は矢のように走って行った
「おいでください おいでください ハーディクヌート様 55
王様を危険からお守りください」

VIII.

暗褐色の頬と額は
 みるみる赤く染まり
目つきは陰しくなった
 大戦に臨む武将の面構え 60
深緑色の角笛を持ち
 五度吹き鳴らすと
新緑の木々は揺れ
 丘から丘へ 角笛はこだました

IX.

息子たちは 雄々しい槍試合で 65
 その夏の朝を過ごしていた
草深い谷で
 父親の吹く角笛を聞いた
その笛は平時には聞かれない
 いざ 開戦の合図 70
すぐさま丘を駆け上がり
 父親の元に駆け寄った

X.

「昨日の夜は じっと静かに
 長すぎた人生の 終わりの時を想っておった
この歳では 第一線から身を引いても 75
 しかたあるまい
しかし ^{ぬすっとただけ}盗人猛々しいノルウェー人が
 ^{うるは}麗しいスコットランドを征服しようとするからには
このハーディクヌートが ^{いくさ}戦や敗北を恐れているとは
 決して言わずまい 80

XI.

ロスセイのロビンよ 弓を引け
 おまえの矢は百発百中
あまたの勇敢な兵たちの顔色を
 死んだと見まごう 真っ青な色に変えてきた
勇敢なトマスよ 槍を持って 85

おまえは他に武器など要らぬ
かつて 槍一本で
ウエストモアランドの手強い世継ぎと戦ったおまえだ

XII.

マルカムよ 雄鹿のように軽やかに
森の中を駆けてゆけ 90
剣と盾の使いに長けた
三千の兵を用意せよ
馬と 鎧 をここへ持て
煌めく 鋼 の剣を持て
敵がその剣さばきこそ知っていたなら 95
恐れをなして逃げるが 必 定

XIII.

類なく 麗 しい妻よ しばしの別れ
(男は妻の手を取った)
歳をとって おまえは一層美しい
美しさで聞こえた乙女たちもかなわぬほど 100
末の息子をここに残して
我らの堂々とした城を守り
銀の錠を差し
豪華なおまえの部屋を護らせよう」

XIV.

奥方の涙は まず美しい頬を濡らし 105
次には 緑色の胴着をも濡らすほど
強く 縫 った絹糸で織られ
輝く銀糸を編み込んだ贅沢なもの
さらに涙は ビーズを縫い込んだエプロンを濡らした
見るも珍しい手縫いのエプロンは 110
他の誰あろう 美しい娘フェアリー自ら
縫ったもの

XV.

ハーディクヌートはヒースの荒野と苔の沼地と
いくつもの丘と谷を越えて行った

途中 怪我をして苦しげに呻^{うめ}いていた 115
一人の騎士に出会った
「ここに横たわり 死にゆく運命^{さだめ}
裏切り者の邪悪な企みに引っかけたのです
邪^{よこしま}な女の微笑みを信じたわたしは
なんと浅はかだったことか」 120

XVI.

「騎士よ わしの城へ行かれよ
絹張りの椅子で休まれよ
妻が優しく介抱しますぞ
人を嫌うことを知らぬ女だ
昼間は妻が自ら付き添い 125
真夜中は侍女たちが付き添いますぞ
美しいフェアリーが あなた様の側^{かたわら}で
心の慰めとなりますぞ

XVII.

若き騎士よ 立ち上がり馬に乗られよ
日はまだ高く 辺りは静か 130
わしの供から 気に入った者を選ぶがよい
城まで案内させますぞ」
にこりともせず 真っ青な顔で
怪我をした騎士は応えた
「親切な領主様 どうそお先へ 135
わたしはここに残ります

XVIII.

わたしには昼も夜も同じ
もはや 喜びも楽しみもありません
間もなく 枝もたわわな木の下で
冷たい死がこの憂いを終わらせます」 140
どんな説得も騎士は聞き入れなかった
勇敢なハーディクヌートは懸命に
言葉を選び 理を説いて
礼儀正しく語ったが 無駄だった

XIX.

ハーディクヌートはチャトン卿の広大な領地を越え 145
 先へ先へと進軍した
 チャトン卿は 敵とみれば己が勇気を試さんとする
 今もって血気盛んな武者
 母方はピクトの家系
 その昔 ピクト人がカレドニアを治めたころ 150
 チャトン卿はピクト王の娘に求婚し
 その王位を継いだのだった

XX.

^{どうも}擻猛で屈強の兵たちを率いて
 ハーディクヌートが丘の高みに着くと
 谷間いっぱい陣営を張った 155
 ノルウェー人の騎馬隊が見えた
 「見よ 勇敢な息子たち 家臣たち
 向こうに 怒り狂った盗人どもが待ちかまえておるわ
 負けを知らぬスコットランド人の剣に挑んで
 運を試そうとしておるわ 160

XXI.

祈りを捧げよ
 十字架にかかり 我らが魂を救われたあの方に
 立派に示せ
 我らに流るるカレドニア人の血を」
 言うが早いか ハーディクヌートは頼みの剣を抜くと 165
 周囲の何千もの兵たちも剣を抜いた
 抜き身の刃は日の光にキラキラ輝き
 戦の合図の角笛があたりに響いた

XXII.

ハーディクヌートは王の軍に合流せんと
 丘を下り 急ぎ進んだ 170
 吟遊詩人はバグパイプを奏し
 ハーディクヌートの前を堂々と進んでいった
 「よくぞ来た 勇敢にも戦の柱である者よ
 国の楯 国の誇りである者よ

スコットランド王に恐れる理由はもはやない 175
ハーディクヌートが側そばにおるのだ」

XXIII.

弓が引かれ 矢が放たれ
群がる両軍 正面衝突
矢先は敵の矢を迎え撃ち
その矢は跳ね返って木に刺さった 180
両軍は猛り狂って 延々と戦った
五分と五分のせめぎ合い
長い一日が終わった時
戦場はまさに血の海と化していた

XXIV.

スコットランド王は ままごとのような戦いくさには 185
我慢がならない気質たちだった
大太刀を抜き 腹立ち紛れに弓を折った
弓では決着つかぬと言わんばかり
高貴なロスセイのロビンが言った 「わたしは弓矢で戦いますぞ
二十人の敵を倒したこの弓で」 190
馬に乗り先頭に立って王は叫んだ
「急げ 皆のもの」

XXV.

スコットランド王はノルウェー王を見つけ出し
一戦交える覚悟だった
だが不幸にも スコットランド王の額に 195
鋭い矢が突き刺さった
傷を確かめるべく手を上げたとき
鋭い矢がもう一本飛んできて
ああ悲しいかな ちょうど額の真ん中に
王の手は串刺しとなった 200

XXVI.

「復讐だ 復讐だ」ロスセイのロビンは叫んだ
おまえの鎧よろいなど
わたしの矢の敵ではないわ」

ロビンの矢は敵の脇腹を射抜いた
もう一本 ロビンは狙いを定め 205
その首を真っ二つに切り裂いた
手から銀の手網が落ち
敵は地面にどっと倒れた

XXVII.

「王様 敵はひどく血を流しています」
もう一度 ロビンが万力^{まんりき}込めて 210
屈強の弓を引くと
太い矢がすばやく飛んだ
ロビンに狙われた敵には災い
ノルウェー女王エルグリードよ 嘆くがいい
貴婦人たちよ 愛^{いと}しい者の運命を嘆くがいい 215
若さと優しかった物腰を嘆くがいい

XXVIII.

「贅沢な上着を脱がせよ
(金の糸で
狩人の網のように繊細に仕立てられ
その下から鋼の鎧が輝いていた) 220
ノルウェー人よ わたしからの贈物だ
そこに染み込んだ血に復讐せよと伝えるがいい
わたしの弓を目の当たりにするならば
いかなる兵器もかなうはずなしと思うはず」

XXIX.

背が高く 肩幅広く 腕っぷし強い 225
誇り高きノルウェー兵が叫んだ
「かの有名なハーディクヌートはどこだ
ブリテン人の王位を脅かしたという男は
ブリテン人がその名にびくつこうとも
おれが奴を嘆かせてやる 230
おれの剣の鋭さに比ぶれば
奴の鎧は女の柔肌^{やわ}」

XXX.

その暴言を ハーディクヌートの大胆さは潔しとせず
若々しい力が身体中にみなぎった
「わしこそがハーディクヌート 235
この日 スコットランド王に誓おう
馬のひづめほどにも低く おまえを打ちのめすと
わしは誓いを守る男だ」
そう言うや 最初の一撃で
敵を血の海に沈めた 240

XXXI.

灰色のオオタカのように ノルウェー兵の目は宙を睨み
恥辱と憎しみでため息ついた
「誉れ高いおれの腕も汚けがされたものよ
おまえに一撃の力をくれてしまったとはな」
そう言って 頭に残忍な一撃を加えると 245
ハーディクヌートは前屈みに崩折くずおれた
その様は いつも貴婦人たちにするように
うやうやしくお辞儀するかのようだった

XXXII.

ほどなく 身を起こしたハーディクヌートは
よろついたことに驚いていた 250
これまで何度も太刀の打撃を受けてはきたが
彼にとって 美しい娘フェアリーが触った程度のことだった
堂々と立ち直ったハーディクヌートの様を見て
ノルウェー兵は仰天した
敵が打ちかかるや否や 間髪を入れず打ちかかり 255
ハーディクヌートは敵の命を奪った

XXXIII.

ヒースの荒野に放たれた火のように
勇敢なトマスが進み出た
強者の敵こわものが怒り狂ったさまで
トマスに向かって馬で挑んだ 260
敵は拍車をかけて茂みの中から飛び出して
屈強の若武者を征服せんとした
トマスは近づく敵に動ずることなく

敵の怒りを迎え撃つ構えを取った

XXXIV.

「粗末な飾りの 短い茶の槍の柄とは 265
いかにも貧しいスコットランドの道具
錆びた切っ先でも人は殺せるというわけか」
敵は大声で嘲り笑った
「幾度も その切っ先の輝きをブリテン人の血で曇らせ
やつらの誇りを奪ったというわけか」 270
トマスは嘲笑う敵の髭面を突き刺し
それ以上嘲る暇は与えなかった

XXXV.

しばらくは 敵は鞍の上で揺られていたが
あぶみはぶらぶら 空あぶみ
伸ばしたままの膝は垂れて 275
もはや死の間際
すぐに固い地面に落ち
ドスンと鈍い音が鳴り響いた
トマスは 全身に血を浴びた敵には
もはや目もくれなかった 280

XXXVI.

何気ない風で 心も動ぜず
トマスは平原を北へと進んでいった
しかし 勝者の常であるように
彼の心は激しい戦の興奮冷めず
えくぼのある乙女たちさえ その心を和らげて 285
優しい愛の睦み合いもできなかった
復讐に燃えたものが受けた嘲りを返すまで 戦は続く
だがやがて 疲れたトマスの目つきもものうくなった

XXXVII.

断末魔に青ざめゆく頬
荒野に満ちる喘ぎ声 290
兵たちは死に 冷たい骸
再び立ち上がることもない

故郷へ帰ることもない
幸せそうな声で
戦^{いくさ}の日の栄光を自慢することもない 295
名誉の負傷を見せびらかすこともない

XXXVIII.

ノルウェーの浜辺では 未亡人となった奥方が
岩を涙で洗うだろう
帆影の見えない海をじっと見渡し
帰らぬ夫を待つだろう 300
エマよ 無駄な望みは捨てよ
夫は土の中
勇猛なスコットランド人といえども
奪った命を持ち去ることはできなかった

XXXIX.

この荒野に十字架が 305
記念碑として立っている
あの夏の日 何千もの兵が
悲惨な戦^{いくさ}に呑み込まれた
スコットランド人である限りは ハーディクヌートを讃えよ
ノルウェー人にその名を恐れさせよ 310
どんなふう^とに戦ったか 時にはいかに情けを示したか
永遠に語られよう

XL.

今 冷たく強い西風が吹き
激しい雨も降ってきた
ハーディクヌートが堂々とした塔に帰り着く前に 315
夜が来た
以前は 松明が燃えて
闇を遥かまで照らした塔
それが今や 喪服のように真っ暗だった
驚いて ハーディクヌートは息を呑んだ 320

XLI.

「妻の部屋に明かりがない

広間にも明かりがない
美しいフェアリーの部屋の周りも真っ暗だ
城壁には見張りもない
どうしたことだ ロバート トマス 言ってくれ」 325
怯えて 息子らは答えない
「下がれ 息子たち わしが先に行く」
だが 子らはすばやく逃げ去った

XLII.

「敵をなぎ倒してきたわしが 急いで駆けてきたのに」
戦^{いくさ}の自慢話もそこまでだった 330
妻と美しいフェアリーを気かけず
他に気を取られていた我が身を恥じた
暗黒の恐怖に呑まれた しかし何が恐ろしいのか
ハーディクヌートはとっさにはわからなかった
ただ恐れ 体を震わせ 手足を震わせた 335
兵たちは皆逃げ去った

(中島久代訳)